

見えざる敵

海野十三

青空文庫

シヤンハイすまろ
上海四馬路の夜霧は濃い。

黄いろい街灯の下をゴソゴソ匍うように歩いている二人連ふたりづれの
人影があつた。

「——うむ、首領かしらこの家いえですぜ。丁度ちやうど七つ目の地下窓ちかそうにあたり
まさあ」

と、斜ななめに深い頬傷ほおきずのあるガツチリした男が、首領の袖そでをひ
つぱつた。

「よし。じゃ入れ、ぬかるなよワーニヤ」

と、首領と呼ばれた眼玉が魚のように大きい男は、懐中からマ
スクを出して、目にかけた。

合図の数だけ入口を叩くと、重い木製の扉ドアが静かに内に開いた。
前室ぜんしつを通つて、次の部屋にとびこむと、ここはガランとした
広間だ。

ガランとしたこの室には、中央に大きな古い卓子テーブルが一台。そ
のほかには隅に背の高い衝立ついたてが一つあるばかり。

「おお、——」

と声があつて、その衝立のうしろから現われた異様いような人物。長
い中国服を着、その上に白い実験衣をフワリと着ている猫背ねこせの男
だった。頭髪とうはつも髭ひげものびつぱなしで、顔の中から出ているのは
色の悪いソーセージのような大きな鼻だけだった。両眼りょうがんの所あ
在りかは、煙色けむりいろのレンズの入った眼鏡さえぎに遮られて、よくは見えない

い。服装や身体つきから見ると、中国人らしいところもあるが、大きな鼻や深い髭から見ると西洋人のようでもある。

「やあ、楊博士ヤンはかせ」とワーニヤは、相手を楊博士とよび、「こっちが首領ウルスキー氏だ」

楊博士は、よろめくようにして卓子の縁ふちをつかんで、グツと顔を前につきだした。

「おお貴様だ。さあ盗んだものを早く返せ」
楊博士は髭をブルブルふるわせて叫んだ。

「うむ、これだろう」

と、ウルスキーは上着の下からピカピカ光る人の顔ほどある黄お金の環うごんかんを出して、博士の方に見せた。

「あッ、それだッ」

と、博士が蛙かえるのようにとびついてゆくのをワーニヤが横合よこあいからとんできて、博士の身体をつきとばした。

博士はドンと尻餅しりもちをついて、蟾蜍ひきがえるのように膨ふくれた。

「ど、どっこい、そうはゆかないよ。見かけに似合にわわず、太い先生だ。これが欲しければ、約束どおり、あれを実験して見せろ。

よく話をしてあつた筈はずじゃないか」

博士は膝ひざ頭がしらに手をおいて、ヨロヨロと立ちあがったが、

「じゃあ、実験をして見せりや、必ず返すというんだナ」

「そうだ。待たせないで早くやらないか」

博士はシブシブと承知の色を示した。

彼は腰を折りまげて、卓子テーブルの下を覗きこむと、のろのろした立居振舞たちいふるまいとはまるでちがった敏捷びんしょうな手つきで、一抱ひとかかえもあろうという大きな硝子壇ガラスびんをとりだして、卓子の上に置いた。その壇は横に大きな口がついて、扁平へんぺいな摺り合わせすあの蓋ふたがついていた。

「さあ、こつちへよつて、よく見るがいい」

博士は手招てまねきした。

しゆりよう

首領ウルスキーは、それツとワーニヤに目くばせをして、今のうちに、奥まった隅にある衝立の蔭を見ておけと合図あいずをした。

ワーニヤは楊博士が卓子の上の硝子壇に気をとられている間に、衝立のうしろを素早く覗いてみたが、そこには仕切られた土間と

壁があるばかりで、外に何物も見えなかった。

ウルスキーはワーニヤの答に、安心の色を見せた。怪博士楊羽ようぼうの魔術？には、これまでに幾度も苦い目にあつていたから。

「さあ、この中を見るがいい。お前たちには何が見えるかな」

二人の訪問客は、博士の指す硝子壘のなかを覗きこんだが、中は正しく空まぎつぽで、なにも見えなかった。

「なにもないじゃないか」

「そうだ。それでいい」と博士は髭おおに蔽おおわれた大きな口をひんまげて薄笑いをし「では待つて居おれ。こうすると何か見えるかな」

と、博士は壘の胴どうなか中なかについている蓋をひらいて、懐ふところから出した小さな紙袋から二匹の蠅はえをポンポンと壘の中に追いやり、そし

て蓋を締めた。

二匹の蠅はブンブン唸りながら、壇のなかを勢よく飛びまわつていた。

「なアんだ。蠅を入れたのじゃないか。それが見えなくてどうする」

ウルスキーは莫迦ばかにされたとも思つたものか、腹立たしそうに叫んだ。

「蠅が二匹、たしかに見えるというのだナ。それでよしよし」楊博士は軽く肯うなずき「では暫く、この壇の中の蠅をよく見ておれ。よく見ておれば、今になにか異変を発見するじやろう。そのときは、儂わしにいつてくれ」

「なにか異変を、だって。うむ、ごま化かされるものか」

二人は顔を硝子壇のそばによせ、目玉をグルグルさせて、壇の中をとびまわる蠅の行方ゆくえを追いかけていた。

そのうちに二人は、

「オヤ、——」

と叫んだ。つづいて間もなく、

「オヤオヤ。これは変だ」

おどろ
と愕きの声をあげた。

「なにか起つたかナ」

「うむ。蠅が二匹とも、どこかに行ってしまった」

「蠅の姿が見えなくなったというわけだナ。どこへも行けやせん

じやないか。密閉した壇の中だ。どこへ行けよう。第一壇に耳をあてて、よく聞いてみるがいい。蠅はたしかに壇の中を飛んでい
るのだ。翅はねの音が聞えるにちがいない」

二人は半信半疑で、大きな硝子壇に耳をつけてみた。

「なるほど、たしかに翅がブーンブーン唸うなっている。それにも拘かかわ
らず蠅の姿が見えない。これは変だ」

ウルスキーとワーニヤは、互いに顔を見合わせて、怪訝けげんな面おもも
持もちだった。

しばらくして二人は、云いあわせたようにホツと吐息といきをついた。

「さあ、これで儂の『消身法しょうしんほう』の実験は終ったのだ。約束ど
おり、その金環きんかんを返して貰もらおう」

と、楊博士はウルスキーの手から金環をふんだくった。ウルスキーは呆然^{ぼうぜん}としている。

「これだこれだ。この金環だ。ああよくもわが手に帰ってきたものだ。わが生命よりも尊^{とうと}いこの世界の宝^{ほうもつ}物！ どれ、よく中を改めてみよう」

黄金の環が、その宝物かと思つたが、博士はその環の一部をしきりにねじつた。すると環が縦に二つにパクリと割れた。博士はソツと片側の金環をとりつけた。中は空^{くう}洞^{どう}であつた。つまりこの金環は、黄金の管^{くだ}を丸く曲げて環にしてあるものだった。

「ややッ。無いぞ無いぞ、大切な宝物がない。オイどうしたのだ。世界一の宝物を早くかえせ」

ウルスキーは気がついて、

「なにを喧やかましいことをいうんだ。黄金おうごんの環かんはちやんとお前の手

に返っているじゃないか」

「金環きんかんが宝物だといってはいないじゃないか。この環の中に入れてあったものを返せ」

「なにも入っていないかったじゃないか」

「嘘をつけ。たしかに入っていた」

「なにをいうんだ。それじゃ一体何が入っていたというんだ」

「毛だ。毛が一本入っていた」

「毛だつて？ はッはッはッ。そうだ、ちぢれた毛が一本入つてたナ。その毛が何だ。毛なんてものは掃はくほどあるじゃないか」

「その毛を返せ。あれは世界の宝物なのだ。十萬メートルの高空で採取した珍しい毛なんだ。それを材料にして調べると、他の遊星の生物のことがよく分るはずなんだ。世界に只一本の毛なんだ。これ、冗談はあとにして、その毛をかえせ」

「この『消身法』の実験装置ととりかえならネ」

「うむ、そんなことはいやだ」と楊博士は首をふった。

「ええい面倒くさい。話はこれだ」と、首領ウルスキーは懐中からピストルを出して、博士の胸もとにつきつけ「折角かえしてやろうというのに、要らなきや黄金の環もこつちへ貰つて置く。

おいワーニヤ。お前はその『消身法』の硝子壘ガラスびんを貰つてゆけ」

「へへえ、この気味のわるい硝子壘をですかい」

そのとき卓子の下から濛々もうもうと煙がふきだした。

「ほら、博士の奥の手が始まった。早く引きあげないと、またこの前のようにひどい目に遭あう、気をつけろ」

首領の怒鳴っているうちに隙すきがあつたものか、博士はヒラリと身を翻ひるがえして、衝立のうしろに逃げこんだ。

「どこへ逃げる。こいつ、待てッ」

とウルスキーは博士を衝立のうしろに追いこんだ。だが、彼は衝立のうしろに、何にもない空間を発見したに過ぎなかつた。そこへ逃げこんだにちがいない博士の姿がまるで煙のように消えてしまったのである。

「ワーニヤ、硝子壘をもつてすぐ逃げろ。ぐずぐずしていると、

生命が危い」

ワーニヤは決心して硝子壘を抱えあげた。壘はわりあいにかか
つた。

二人は出口の方へ向つて走りだした。

とたんにガチャンと大きな音がした。

「失敗しまつた」

とワーニヤが叫んだが、もう遅かつた。彼の抱えていた硝子壘
は床の上に墜おちて、粉こな々こなになつた。

二人はワツといつて、外に飛びだした。

どっちへ行つてよいかわからぬ四馬路すまろの濃い霧の中を、二人は
前になり後になり、必死に駆けだした。

それでも、とにかく博士の追跡をのがれて、首領ウルスキーと
 ワーニヤは、一時間あまり後に仏租界に聳えたつ大東新報
 ビルの裏口の秘密扉の前に辿りついた。

悪漢ウルスキーなる人物は、マスクを取ると、いま上海

国際社交界の大立者として知らぬ人なき大東新報社長ジョン・

ウルランドその人に外ならなかつた。ウルランド氏は、謹厳い

やしくもせぬ模範的紳士として、社交界の物言う花から覘いうち

の標的となつていた人物だつた。

秘密ボタンを押すと、扉がひらいた。二人はビルの中へ転げこ

むように入つていった。

奥まつた密室の安楽椅子のうゑに身体をなげだすと、二人は顔

を見合みあせた。

「おいワーニヤ。なんだって、あれほど大切な壘を床の上に落したんだ。大きな苦心を積んで、やっと手に入れたと思つたのに、手前の腕も鈍にぶつたな」

「鈍つたといわれちや、俺あつしも腹が立ちまさあ。なアに、あの壘には長紐ながひもがついていて、その元を卓テーブル子にくくりつけてあつたんです。その紐ひもてやつが、やつぱり目に見えないやつだったんで、俺あつしだって化物ばけものじゃないから、見えやしません。腕からスポンとぬけて、足の下でガチャンといったときに、ハハア目に見えない紐ひもがついてたんだなど、気がついてたつてえわけです。化物でもなけりや、はじめから気がつく筈はずがない。——」

「ワーニヤ、愚痴をいうのはよせ。いまさらグズグズいったって、元にかえりやしない」

ウルスキーは腹立たしそうに、太い葉巻をガリガリと噛んだ。

「ねえ、首領」とワーニヤは機嫌をとるようにいった。「楊博士の奴は、ひどく悄気てたじやないですか。たかが、たった一本の毛のことでねえ。莫迦らしいつちやないや」

「うん。学者なんてものは、おかしなものさ。だが——」と彼は起き直って「あれがほんとに十萬メートルの上空で採取したもので、火星の生物の毛でもあったら、こいつは素晴らしい新聞の特種だ。よオし、こいつは儲け仕事だ。オイ、ワーニヤ、お前すぐ編集次長のカメネフを電話でよびだせ」

「でも首領」とワーニヤは急に不安な顔をして「そいつは大きに考え物ですぞ。あの宝物の毛をなくしたことについて博士は千萬ドルの紙幣を焼かれたようにブルブルふる慄えて怒っていましたぜ。

あいつはきつと復讐せずにはいないでしょう。ああそれなのに、あ

かせいじゆう

の火星獣の毛のことをうちの新聞に素っぱぬくなんて、彼奴の

ふんがい

憤慨の火に油を注ぐそそようなものですよ。そしてもしか、社長が

ギヤングの大將だと嗅ぎかつけられてごらんさい。そのときは新

聞の読者は半分以下に減へりますよ。これは考えなおしたがいい」

「なにを臆おくびよう

病なことをいいだすんだ。こんな素晴らしいチャ

ンスを逃がすなんてえことが出来ると思うかい。引込んでいろ」

「だって首領。あの楊博士と来た日にや……」

「うるさい。黙ってる」

ウルスキーは肘掛椅子ひじかけいすからバネ人形のようにとびあがって、喫いかけの葉巻を力一杯床ゆかにたたきつけた。

その夜は無事に過ぎた。

次の日のお昼休みにレーキス・ホテルに出かけたウルスキーならぬ大東新報社長ウルランド氏は、午後二時になつても社へ戻つてこなかった。十分すぎに、例の火星獣の毛の原稿を抱かかえて待っていた次長が、遂に待ちかねてホテルに電話をかけた。すると意外なる話にぶつかった。

「ウルランド氏の姿が、貸切りの休憩室に見えなくなっているんです。部屋には内側からチャンと鍵がかかっているのに、どうさ

れたんでしようか。これから警務部へ電話をして、警官に来て貰おうと思つていたところですよ」

「なんでもいいから早く社長を探してくれ。急ぎの原稿があるんだ。社長に早く見せないと、乃公は馘おれになるんだ」

そういつた次長も、上衣うわぎをつかむが早いかすぐエレベーターの方に駛はしつていた。社長を至急探しださねばならない。

工部局の警官隊がロツジ部長に引率いんそつされて、レーキス・ホテルにのりこんできた。休憩室の扉ドアは、華はなやかに外からうち壊こわされた。一行は、誰もいない室内に入ったときに、なんだか低い唸うなり声ごえを聞いたように思ったが、室内を探してみると、猫一匹いなかつた。全くの空室あきしつだつた。

「いいかね。ウルランド氏は室内に入ると、内側から鍵をかけて、上衣をこの椅子の上にかけて、靴をぬぎ揃えてこっちのベッドに長々と寝た。——それだけは推理で分つとる」

とロツジ部長は得意そうに、あたりを見廻したが、事実ウルランド氏の靴も上着も、そこには見えなかったのである。社長は服装ごと、どこかに姿を消してしまったのである。

ウルランド氏の失踪事件は、しつそうじけんたちまち上シヤンハイ海の全市に知れわたった。

「大東新報社長、はくちゆう白昼レーキス・ホテルの密室内に行方不明となる！」

「ウルランド氏の失踪。ギヤング団ウルスキー一味の仕業しわざと見て、

目下配中！」

などと、新聞やラジオでは、刻々にその搜索模様を報道して、町の人気をあげた。騒ぎは、ますます大きくなってゆく。

工部局の活動、秘密警察の協力、素人探偵の競演——などと、物すごいウルランド氏搜索の手がつくされたが、ウルランド氏の情報には更にわからなかった。

今日こそは、明日こそはと、市民たちもウルランド氏の発見を期待していたが、すべては空しく外れてしまひ、やがて二週間の日が流れた。ウルランド氏の生命は、誰の目にも、まず絶望と見られた。

ところがここに一人、ウルランド氏の生命の安全なることを知

つてゐる人物があつた。それは当のウルランド氏そのひとに外ほかならなかつた。

彼は、もうかれこれ十日あまりも、町の騷そうじよう擾じようを見てくらし
 ているのだつた。彼は、ショーウインドーらしき大きな硝子ガラスをと
 おして、一部始終を眺めて暮らしてゐるのだつた。彼の前には、
 紛まぎれもなく賑にぎやかな上シャンハイ海ナンキンろ、南京路の雑ざつ沓とうが展開してゐるの
 だつた。それも暁あかつきの南京路の光景から、明あける陽ひをうけた繁華はんかな時
 間の光景から、やがて陽は西に傾かたむき夜の幕とぼりが降りて、いよいよ夜
 の全世界と化かした光景、さては夜も更ふけて酔すい漢かんと、彼の手下ど
 もが徘徊はいかいする深夜の光景に至るまで、大小洩だいしやうもれなく、南京路
 の街頭を見つくし見飽みあきしてゐるのだつた。

どうしたことかからこうなったのか、彼には始まりがよく分らなかった。

ともかくも、捕虜ほりよになったなど気がついたときは、今から十日ほど前のことだ。彼はこのショーウインドーの中に長々と伸びていたのだ。

それからこの細長いショーウインドーの中の生活が始まった。彼は一步もその中から出されなかったのだ。

彼の目の前を過ぎゆく人に向って、SOSを叫んだ。硝子をドンドン叩いて、通行の人の注意を喚起かんきした。しかし誰一人、彼の方を見る者がなかった。

「変だなア。なぜ、こつちを見てくれないんだろう」

彼は諒解りようかいに苦しんだ。彼の鼻の先に男や女がとおるのである。それにも拘かかわらず、誰もこつちを向いてくれない。こんな情なさけない話はなかつた。

或るときは、市民の一人がショーウインドーに背をもたせかけて、大東新報を読みだした。彼は自分の失踪事件がデカデカとでてるのを知つた。

「おい、ウルランドはここにいるんだ」

とその男の背中と思うあたりの硝子を破われんばかりに叩いたが、彼は背中に蚤のみがゴソゴソ動いたほども感じないで、やがて向うへいつてしまった。

三日目に、手下のワーニヤが乾分こぶんをつれてゾロゾロと通つてい

った。彼は必死になって、手をふり足を動かさず、ゴリラのように喚わめいたが、それもやっぱり無駄に終った。

雑沓ざつとうのなかの無人島に、彼はとりのこされているのだ。普通の無人島ならば、救いの船がとおりにかかることもある。だが、この細長い巷ちまたの無人島は、完全に人間界を絶縁ぜつえんされてあつた。

三度三度の食事だけは、妙な孔あなからチャンと差入れられた。それは子供が食べるほどの少量だったので、彼はいつもガツガツ喰つた。

排泄作用はいせつぎようが起つたときには、そこに差入れてある便器べんきに果たはした。はじめは雑沓ざつとうする大通りを前にして、とてもそんな恥はづかしいことは出来なかつたが、どうやらこつちから往来が見えても、

外からこつちが見えないと分つてからは、すこし気が楽になった。そのうち彼は往来を檻おりの中の猿のようにジロジロ眺ながめながら用を足すまでになつた。

通行人の新聞面を見ていると、いよいよ彼ウルランド氏の生命は絶望となつたと出ていた。彼はもうすっかり弱りきつて、腹を立てる元気もなかつた。

十一日目に、はじめて彼のうしろの壁から人の声が聞えてきた。「悪漢あつかんウルスキーよ。その硝子函ガラスばこの居心地いごこちはどうじゃネ」

「あツ、——」とウルランド氏は顔色をかえた。それは正まぎに、例の楊博士ヤンはかせの皺しわ枯がれ声こゑに相違なかつたのである。

「はッはッはッ。今ぞ知つたか。消身法しょうしんほうの偉力いりよくを」

「なにッ」

「汝なんじの手に触ふれる板硝子と、往来から見える板硝子との間には、

五十センチの間かんげき隙がある。その間隙に、儂わしの発明になる電気廻か
いせつきよう

折鏡をつかつた消身装置が廻っているのだ。汝なんじの方から見れば外が見えるが、外から見ると何も見えないのだ。どうだ分つたか」

ウルランド氏は蒼白そうはくになつて戦慄せんりつした。

「おいひどいことをするな。早くここから出してくれ。貴様の云うことは何でも聞くからここからすぐ出してくれ」

楊博士は薄笑いをして、

「まあ自分そこに逗とうりゆう留するがいい。だが町もいい加減見飽かげんみあき

たろうから、消してやろう」

そういった声の下に、今まで見えていた往来おうらいが、まるで日暮れのように暗くなり、やがて真暗まっくらなあやめも分らぬ闇と変りはてた。その代り電灯が一つポツンとついた。

それと入れ代つて、繁華はんかな南京路ナンキンロの往来では、俄にわかに騒ぎがはじまった。ショーウィンドーの中で、半裸はんらたい体になつた紳士が、いかがわしい動作を通行人に見せているというので、たいへんな人ばかりだった。

そのうちに、何だあれは行方不明のウルランド氏ではないかといひ出した者があり、それは一大事だと騒ぎはますます大きくなつていった。これは楊博士が、消身装置の廻折鏡を反対に廻した

ために、今まで見えていたシヨーウインドー外がいの光景が見えなくなり、その代り今まで外から見えなかつたシヨーウインドーの内
部が明らかさまに見えるようになったのだつた。そういうこととは
しらず、シヨーウインドーの中のウルランド氏は悠々と公衆の面
前で用をたしている。市民は愕おどろきかつ呆あきれ、やがてはとめどもな
く笑いだした。なんとという無恥むちであろうか。

警官隊が駈かけつけたが、そのウルランド氏を堅固けんこな硝子ガラス函ばこの
中から救いだすには、まる一日かかつた。二枚の板硝子の間に仕
掛けられていた楊博士の消身装置は、その救助作業のうちに壊こわさ
れてしまった。

救い出されたウルランド氏は、転ころんでも只ただは起きない覚悟で、

遭難記を自分の大東新報に掲げたが、それは市民たちの侮蔑を買
つただけであつた。社交界にウルランド氏が現れたときは、さす
がの貴婦人たちも、一せいに背中を向けた。誰も彼もニユース映
画によつてウルランド氏の生理現象を詳かに見ていたので、そう
いう人物と握手しようとは、誰一人として思わなかつたのである。
ここに於て楊博士の復讐は、ようやく成つたようであるが、
その後、この広い上海のなかに博士の姿を見た者は只の一人
もなかつた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第7巻 地球要塞」三二書房

1990（平成2）年4月30日第1版第1刷発行

入力…tatsuki

校正：浅原庸子

2002年10月21日作成

2003年5月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

見えざる敵

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>